
牙

三嶋文絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

牙

【Nコード】

N4866P

【作者名】

三嶋文絵

【あらすじ】

妹が事故に遭った。父の愛人とその娘たちが暮らすエリアで。知らせを聞いた青年たちは、好いてもいないはずの異母妹の許へ駆けつける。★外部サイト「みくり」掲載作品です。

(前書き)

「voice」からの連作です。単独でも読めるように努めたつもりですが、併せてお読みいただけると嬉しいです。

連絡してきたのは下の弟だった。

「……今、何て言った」

「明日香が事故に遭ったんだよ」

「どこで」

「……第五区のストリート」

「なんで」

バン、と俺は壁を叩いた。

「第五区なんだ！」

偶然のはずがない。第七区の間人が用もなしに第五区まで行くものか。なら、なんで。

「何だよ、兄貴」

上の弟が飛んできた。振り払うようにして隣の部屋へ行き、ノート――二つ折りの端末を開く。明日香は十二歳だ。移動データへのアクセスは可能だ。足取りは調べられるはずだ。

保護者なら。

「兄貴、落ち着けて！俺らの権限じゃ無理だ」

アクセスを繰り返していると、事情を聞いたらしい弟が制止した。落ち着けばわかることだった。兄という権限で閲覧できるデータには限りがある。明日香がいつどのような経路で第五区のストリートに至ったのか、自由に見られるのは本人と親だけだ。

――何を調べようっていうんだ。何を確かめようっていうんだ。決まってる、わかりきってるじゃないか。あいつが第五区に何の用があるかなんて。

第五区には父の愛人と、その娘たちがいる。

六歳のときに母が死んだ。産後の肥立ちが悪かったのだと聞いている。上の弟を産んだときに体を悪くして、三人目は無理だと言わ

れていたらしい。

父の長女は俺の五歳下だ。

難しいパズルじゃない。父母の間には女子がいなかった。父の愛人が女子を産んだ。母は命と引き換えに三人目を産んだ。結果的にはこの三人目も男子だったわけで、母がそのことに落胆したかどうかは知る由もないが――子供の性別は根本的な問題じゃあない。

母の死後にこの愛人と再婚しなかったところを見ると、父も罪悪感は覚えたらしい。といってきっぱり別れたわけでもない。愛人はその後も二人目になる女子を産んでいる。

十歳のときに父が再婚した。相手も再婚だった。あの愛人でなかったことを俺は歓迎した。一年後に明日香が生まれた。

反発を感じ始めたのは、反抗期にさしかかった頃だったか。父は母の産褥死の僅か四年後に再婚し、五年後に妹を産ませたのである。歓迎するところじゃなかっただろうと、そのときになって腹が立った。といってとつくに再婚しているものを、今さら反対するわけにもいかない。うまく騙されたような気分だった。

再婚が不満となれば継母の存在も不満で、その娘である明日香にも不満を抱くようになった。と、自分では考えていた。実際には逆だったのだろう。両親揃っている明日香が妬ましくなってきた、その明日香を産んだ継母も気に入らなくなつて、そもそも再婚自体が――と、本当はそういう順番だったのだと思う。

が、どちらにせよ、要するに。

俺は明日香が気に食わなかったのだ。

翌朝早くの長距離トレインに乗った。高等課程への進学を期に、俺と上の弟とは実家を離れている。総合ステーションまでで二時間半、短距離トレインに乗り換えて実家が病院まで行くにはさらに四十分かかるだろう。先は長い。

「外でそんな顔するなよ。兄貴」

弟が眉を寄せた。

「俺はおまえみたいに器用じゃないんだ」

「だったら家にいるうちにぶちまけといてくれよ」

「おまえみたいに冷静でもないんだ」

俺はむっつりと言った。

性別と母親とを問わず、兄弟の中で一番出来がいいのはこいつだ。二番目は明日香だろう。兄であってよかったのか悪かったのかわからない。弟や妹に叶わないなんて思う反面、こいつらが兄や姉だったらどうしようもなかったような気もする。

「父さんや小母さんの前で変なこと言うなよ」

「そこまで馬鹿じゃない」

「顔に出すなとは言わないから」

「……努力は、する」

無駄な努力に終わるかもしれないが。

明日香はまだ無事だ。いや、無事とは言わない。頭を打ったそうで意識が戻らず、いつ容態が急変してもおかしくないらしい。だが、まだ、生きている。だから、とりあえず、そこはいい。

問題は事故に遭った場所だ。事故現場に行った理由だ。第五区のストリート。父の愛人の住むエリア。

公共の場に出た人間は、公共のシステムに常に追跡されている。自分自身のデータは誰でも自由に閲覧できるし、制限や権限の問題はあるものの、他者がアクセスできる場合もある。未成年の保護者は代表的な例だ。親たちが何かを怪しんで、あるいは気紛れを起こして調べれば、映像や音声までは再生できないにしても、いつどこにいたかはわかるのである。だからきつと、知られたら知られたで構わなかったのだろう。他のどこでもないあのエリアに行ったことを。

恐らく目的は父の愛人でなく、俺らとも明日香とも母親の違う姉妹たちの方だ。一目見たいの一目会いたいのと半端なことは望まずに、どうせならがつつりと話してきたに違いない。……何を。どうするつもりで。何を話したら、どうなると思って。

——明日香がどういうつもりでいたら、どうなのか。

俺はがりがり頭を掻きむしった。あいつがあいつらに会いに行ったら何だってんだ。勝手だろうよ、あいつの。

「やられたな」

ぽそりと横で弟が呟いた。

「何がだよ」

「いや。俺たちは何しに行くんだろうと思ってさ」

「……そりゃ」

反射的に答えようとして、詰まる。

「っていうか、俺の台詞だろ。おまえはそれをなだめる役だろうが」

「いいのかよ、そんな分担で」

弟は笑った。いいのか、そっちこそ。

「……俺たちが取るもの取りあえず駆けつけたところで、別に明日香が劇的に快復するわけじゃない。そんなことはわかってるのにすっ飛んでいこうとしてるわけさ」

「まあ、な」

「そこまで明日香に思い入れがあるとは知らなかった」

人事のように言うから俺だけ呆れられているみたいだが、弟自身のことでもあるのだろう。連絡があつた直後にこの便の乗車予約を入れたのはこいつだ。

事故に遭ったのが例えば下の弟なら、軽傷でも飛んでいったらろーうし、そのことに疑問も抱かなかつたろう。弟たちと明日香とは、しかし俺にとって同列ではないのだ。この弟にとっても、恐らく。

肘かけの上に、弟は器用に頬杖をついた。

「こっちサイドのつもりでいたんだよ。黙って向こうに会いに行くとは思わなかった」

……そういうことか。

上の妹の誕生は母の死を引き起こした。中の妹は露骨な敵意を向けてくる。下の妹である明日香が、あの二人と結託したらと考えると不愉快だった。

だからこちらに引き込んでおきたかった。引き込めているつもりでいた。正直俺にはなかなか難しかったけれど、実家を離れて目にするこさえ減ってからは、たまに会うときぐらいは和らいだ気持ちで接することができるようになった。気に食わないといっても他の二人とは違うのである。俺よりも賢明だったり素直だったりする弟たちは、もっと前からずっと上手に親しんでいた。

だと、いうのに。

「飼ってる犬に噛まれかけた気分だ」

何だかモヤモヤする、ぐらしか俺には言えないところを、的確に分析して弟が溜め息を吐く。明日香は無断であいつらと接触した。断りを入れる義務などないにしても、よりによってあいつらに会うことを黙っていた。自分の年齢ではまだ確実には隠し通せないのをわかっていて。わざわざ知らせるようなことも、わざわざ隠すようなことも考えていなかったわけだ。……取り込めてなどいなかったのだ。

寝返った、裏切ったというわけではない。今はまだ。が、先はわからない。隠れてあいつらに会おうとした明日香は隠れてあいつらの味方になるかもしれず、知られてもよかったのだろう明日香は知ったときの俺たちを恐れていない。

牙を剥きうるのだ。弟たちとも違って。

「……牙なら抜いてやる」

口の中で言ったのを、聞き取ったためか聞き取れなかったためか、問うような視線を弟はこちらに向けた。

「ちょうどいいじゃないか、死にかけたんだ。兄妹愛に目覚めてもおかしくない」

そう言えば十分通じたようだった。頭がよくて付き合いの長いやつが相手だと楽だ。

「それはつまり、兄貴が急に明日香べったりになるってことか？」

「……そうは言っていないだろ」

「ハ、似合わない」

「言っていないだろうが」

からかうような笑い顔が段々、壺に嵌まった感じになってきた。想像したらしい。俺が明日香べったりになったら、そりゃあ似合わないで笑えるだろう。この野郎。

今に見てろ。あいつらに見向きもしないようにしてやる。弟たちがそうであるように、本気でこっち側につけてやる。少々子供じみた決意を、俺は固めていた。

長距離から短距離に乗り換える総合ステーションまで、下の弟が迎えに来ていた。いいって言っただろうと上の弟が言えば落ち着かないんだよと返し、学校行けよと俺がつっこめばやだよ勿体ないと笑った。思いなしか妙にはしゃいでいるようで、トレインでは空いた席に素早く座って、両側をばんばんと叩いて俺たちを促したりした。まず実家に行って荷物を置いてから、病室には弟たちと訪れた。

下の弟のはしゃいだ様子はこのときには跡形もなかった。何の不思議もない。裏返しだったことぐらい俺にだってわかる。体からまだ抜けずにいる何本かのチューブがなかったとしても。普段は澁刺と飛び回っている人間の、柄にもなく神妙になってしまうような顔色を見れば。

——これがあの、明日香か。

「……俺はさ。こいつが気に食わなかったんだ」

「知ってるよ」

「大人気ないとは思うけど。……どっちかって言ったら、やっぱ、嫌いだ」

「わかってる。随分辛抱してるよね」

「……まだマシだしな」

父の愛人の娘たちよりも。

弟たちとはかく俺は無理をしていると、鋭い明日香は気づいていただろう。だからといって思い悩む性格じゃあないが。

「けど、さ。死ぬかもしれないってなると。……やっぱ、な。妹は

妹だし。一緒に暮らしてきたわけだし」

弟たちが目を円くしたような気がする。特に上の弟が。

しょうがないだろう、十二歳の子供がこんな状態で目の前にいるんだ。俺にも人並みの感性はある。二十歳を過ぎれば痛々しくないのでとか、そういう問題はまた別として。

ふと、下の弟がベッドに近づいた。場所を譲れば枕元にかがむ。

何だかほっとする。こいつの役だ、こういうのは。

「……死ぬ……かな？」

「死なないとしても、起きるかどうか」

そういう話だった。頭を打ったと。

「……こいつが死んだら。あの二人、別れると思うか」

俺は俺の言いそうなことを言った。

「ないと思うな」

「だな」

弟たちが口々に否定する。だよな、と俺も呟いた。父と継母の絆は強固だ。子の鎔なんて必要ない。再婚に、あるいは明日香に、そして継母に、反発を感じ始めてからも、とうとう憎みきれなかったのは、二人が似合いの夫婦だったからだ。

「こいつが死んだって、得はない……な」

弟たちとは違う。どうか死なないでくれとまでは思わない。が、死んでしまえとも思わない。他の二人とも違う。

だったら助かるに越したことはない。どっちでもいいなら生きていた方がいい。本当ならこの先も長く生きていくはずの、義務教育も終えていない子供ならなおさら。……それだけのことだ。

「さっさと起きろよ。入院費嵩む」

弟越しに見下ろした。未成年への治療を停止することは絶対に許されないから、出費が続こうが増えようが周りにはどうすることもできない。おまえが目を覚ますしかないんだよ。長引けば長引くほど高くつくんだ、一日でも一時間でも一秒でも早くしろ。

それに、こっちは予定があるんだ——おまえが目を覚ました後の。

そんなところで逆らうな。大体おまえらしくもない。突き刺したら
抜けなくなるような、無駄にリスキの高い牙なんて。そうまでして
こっち側につきたくないわけじゃないだろう。

だから。

だから、明日香。

儀式のように進み出て、上の弟が俺と並んだ。そうして横目で意
味ありげにこちらを見る。……何だよ。っていうか、わかるだろう
よ。流石に俺がそこまで言うわけにいかないだろうが。

周りに悟られないように、ほんの一瞬口許だけで弟は笑った。そ
れからベッドへ目を落とす。先ほど俺がそうしたように。

「死ぬなよ。……明日香」

……頭がよくて付き合いの長いやつがいると便利だ。やっぱり見
通してんじゃねえか。

不思議そうだったり不審そうだったりする視線を感じながら、少
しも意外そうにしていな顔俺は睨んだ。聞いただろう。わかっ
たな。

二度と勝手に行くんじゃない。——どこへも。

（後書き）

連作の4本目となる「誰が為」を掲載しました。併せてお読みいただけると嬉しいです。
（2011／7／24追記）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4866p/>

牙

2011年8月21日03時16分発行